

孤独

中村明王

そこには、花火を観にきていた。
きっかけは覚えていない。

ただ、友人二人からはぐれた私は、
一人、喧騒の中で佇んでいた。

人の波に攫われながら、
どうにか連絡を取ろうと試みる。

メッセージ、

エラー。

着信、

不通。

不安に苛まれる私を他所に、
周囲の歓声がいつそう大きくなり、
私はなにかに包まれる。

瞬間、

炸裂音。

一瞬の爆発の後に、世界は音を失った。

再度、

炸裂音。

大地は激しく鳴らされる。

大地の振動と圧倒的な爆発音は、
私の心を押し潰すよう。

炸裂音。

巨大な足を振り下ろす。

炸裂音。

地面に平を叩きつける。

なにかは巨人の形を取り、
確かに私に近づくよう。

炸裂音。

はるか頭上の視線から、
逃れるように木の影へ。

炸裂音。

音波は私を逃がさない。

炸裂音。

なにかは私を離さない。

なにかを必死に振り払うように、
反射的に見てしまった。

炸裂音。

始めに、視覚が失われた。

次に、聴覚が奪われた。

最後に、触覚は機能を止めた。

そのあまりの眩しさに、
そのあまりの激しさに、
私の体は動かない。

炸裂音。

閃光、

轟音、

衝撃。

その全てが襲いくる。

炸裂音。

なにかに掴まれ、心を潰される。

炸裂音。

もう何も考えられない。

炸裂音。

炸裂音。

炸裂音。

炸裂音。

どれくらい時間が経っただろう。

ようやく私は友人からの着信に気がついた。